帰国報告　メルボルン日本人学校

～「質の高い日本の教育」を目指して～

前メルボルン日本人学校
現札幌市立前田北中学校　新井　拓

１．オーストラリア・メルボルンの概要

＜人口・面積＞

メルボルンは、オーストラリア大陸の南東に位置するビクトリア州の州都である。ビクトリア州はタスマニア州に次いで２番目に小さい州で、面積は国土の３％（２２７，６００㎢)に過ぎない。しかし、人口は約２５％にあたる４８８万人で、現在最も安定した、工業化も進んだ州で、国民総生産額の約１／３を占めている。 しかし、工業化が進んだとは言いながら、美しい自然が多く残されており、メルボルンは「Garden City」と呼ばれている。

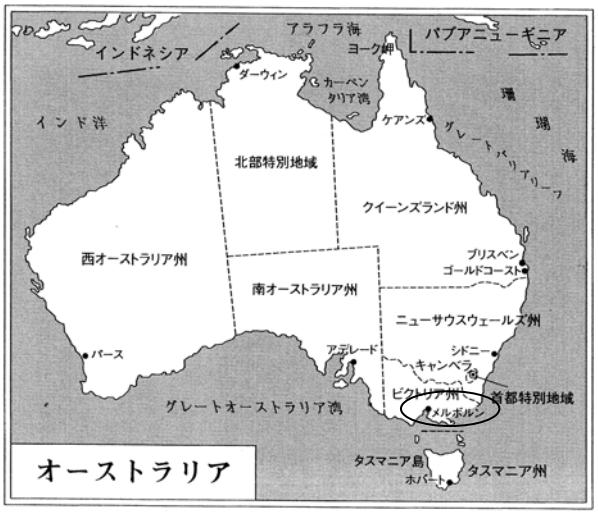
メルボルンは、人口約３７０万人、シドニーの約４２０万人に次いでオーストラリア第２の都市であり、過去にオーストラリアの首都であったり、オリンピックが開催されたりしたこともあるという文化都市である。治安も良く、世界で最も暮らしやすい都市の一つだと言われている。

都市の中心部「シティー」は、１９世紀の建物と近代的な高層ビルが好対照を見せており、並木に縁取られた広く美しい街路や庭園・公園も多く、落ち着いた感じを与えている。

また、ポートフィリップ湾の最深部に位置し、高いビルからは海を眺めることもできる。シティーからも学校から車で１０分もドライブすれば海に出ることができる。ヨットが帆走し、ウインドサーフィンを楽しむ人たちも見られる。

オーストラリアはマルチカルチャリズム（多文化主義）をとっており、多くの民族が生活している。メルボルンにも多くの民族が暮らしており、それぞれの文化を認め合っている。イタリア人街・中国人街・ベトナム人街などもある。

＜地理・気候＞



東経１４５度、南緯３８度にあり、気候的には日本と同じように四季がある。夏は晴天の日が多く、時には北西の砂漠からの熱風に見舞われ、４０℃を越えることもあるが、湿度が低いので蒸し暑さは感じない。また南から風が吹くと急に寒くなるときがあり、これを「クールチェンジ」と言う。冬も最低気温が４度くらいと比較的温暖であり、平地では霜や雪は見られない。また、一日の温度差が大きく、「メルボルンは、１日の中に四季がある。」と言われている。

広大なオーストラリアでは、東部と西部で２時間の時差がある。東部のクイーンズランド州、ニューサウスウェールズ州の大部分、ビクトリア州、タスマニア州は日本より１時間早く、中央部のノーザンテリトリー州と南オーストラリア州は日本より３０分早く、西オーストラリア州は、日本より１時間遅くなる。

さらに、夏時間（サマータイム）があり、１０月末から夏時間が始まる。通常より１時間早くなり、日本との時差が２時間となり３月まで続く。

＜歴史＞

１７７０年に英国海軍のキャプテン＝クックがオーストラリアの東海岸を発見して、東経１３５度以東の地を英国領とした。そして１７８８年、フィリプス総督がシドニー流刑植民地を創設して、開拓を始めた。この年をオーストラリア建国の年にしている。

ビクトリア州への入植が始まったのは１８３４年で、当時の英国首相にちなんで、名付けられたメルボルン居留地が急速に発展していった。

１８５１年に、それまで属していたニュー・サウス・ウェールズ植民地から分かれ、ビクトリア自治植民地（当時の英国女王クイーン＝ビクトリアにちなんで名前を付けた）になったことや、同年バララットやベンディゴなどの近接地で、金鉱が発見されたことなどによって、メルボルンは飛躍的に人口が増えた。そして、１８５０年代に、都市ガスの供給、鉄道の敷設、電話の開通、メルボルン大学の開設など、近代都市として発展し、１９０１年連邦政府の成立に伴い、オーストラリアの首都となった。（その後、１９２７年に首都はキャンベラに移る）また、１９５６年には、第16 回オリンピック大会が南半球で初めて開かれた。

＜日本とオーストラリアの関係史＞

西暦	事　　柄	西暦	事　　柄
1871	最初の日本人定住者(曲芸師)がｵｰｽﾄﾗﾘｱに到着	1956	メルボルンオリンピック開催
1874	最初の日本人真珠取り潜水夫がｵｰｽﾄﾗﾘｱに渡る	1957	日豪通商協定締結、ｵｰｽﾄﾗﾘｱの日本向け輸出開始
1875	メルボルン万国博覧会開催、日本からも参加	1966	ｵｰｽﾄﾗﾘｱの鉄鉱石の日本輸出開始
1880	日本人真珠取り潜水夫がﾌﾞﾙｰﾑ･木曜島･ﾀﾞ	1976	日豪文化協定締結
～90	ｰｳｨﾝに多数到着	1977	日豪友好協定締結
1890	貿易商兼松房次郎がｼﾄﾞﾆｰに支店を開く	1980	ﾜｰｷﾝｸﾞﾎﾘﾃﾞｰ制度が始まり、日本とｵｰｽﾄﾗﾘｱ
1905	ｵｰｽﾄﾗﾘｱで最初に稲作を始めた日本人移民		の若者が互いの国で短期間仕事に就き、旅
	高須賀穣が渡豪		行や文化交流が可能となる
1914	第一次世界大戦、同盟国として参戦	1981	日豪渡り鳥保護協定締結
1939	日本軍による真珠湾攻撃	1989	ｵｰｽﾄﾗﾘｱの液化天然ガス(LNG)の日本向け
1941	ｵｰｽﾄﾗﾘｱと日本が宣戦布告		輸出開始。第一回ｱｼﾞｱ太平洋経済協力会議
1942	日本軍がﾀﾞｰｳｨﾝなど、ｵｰｽﾄﾗﾘｱ北部を爆撃、		(APEC)をｷｬﾝﾍﾞﾗで開催
	日本の潜水艦がｼﾄﾞﾆｰ湾を攻撃	1990	東京･三田にｵｰｽﾄﾗﾘｱ大使館新築完成
1944	カウラ事件(ｶｳﾗの日本人捕虜の集団脱走と自決)	2000	シドニーオリンピック開催
1946	ｵｰｽﾄﾗﾘｱ占領軍が広島県呉市と愛媛県松山	2006	日豪交流 30 周年。約 200 の記念事業がオ
	市に駐留		ーストラリア各地で開催される。

＜経済・社会＞

第二次世界大戦後、メルボルンの経済は、豊かな第一次産業の基盤の上に、軽工業から重工業に移行し、ビクトリア州全体の鉱物資源、農産物、自動車及び部品等、全オーストラリアの集散地として大きな役割を果たしてきた。

メルボルン港は、シドニー港とともにこの国の二大輸出港となっており、メルボルン国際空港も諸外国に向けた空の窓口となっている。また、日本への直航便は、カンタス航空と日本航空の共同運航で週３便ほどとなっている。

メルボルンは、もともと英国系の移民が多く、一般に保守的な傾向があったが、戦後は、連邦政府の積極的な移民政策により、ヨーロッパ系の移民が増えて、イタリア人、ギリシャ人、オランダ人、ドイツ人、ユーゴスラビア人と国際的な彩り

を添えている。最近は、アジア系の移民も増えており、特に中国人、ベトナム人、インド人が多く、マルチカルチャリズムの様を呈している。

２０００年７月からＧＳＴ(消費税：１０％)が導入された。食品は魚・肉・野菜・果物等の生鮮食料品にはかからないが、加工した食料品や酒・コーヒー等の嗜好品及び衣料品などには課税される。また外食も課税の対象となる。

２．メルボルン日本人学校の概要

〈所在地〉

メルボルン日本人学校は、ビクトリア州の州都メルボルンの中心から南東へ約１０キロ離れたグレンアイラ市の閑静な住宅街に位置している。

＜設置者及びステータス＞

メルボルン日本人学校は、メルボルン商工会議所によって設置され、ビクトリア州政府による認可を受けた全日制の私立学校である。メルボルン日本人学校は、メルボルン商工会議所から権限委譲された学校運営理事会によって管理運営される。

＜基本方針＞

メルボルン日本人学校は、メルボルン周辺に在住する日本人子女に対して、オーストラリアの現地校としての枠組みの中で、日本国憲法・教育基本法・学校教育法等の趣旨に則し、学習指導要領に準じた幼児・初等・中等教育をす推進する。

〈教育目標と指導の重点〉

①教育目標

「日本人としての自覚を持って国際社会を生きていくこころの豊かな子どもの育成」
（学力の更なる向上と豊かなこころをもった子どもの育成）

めざす子ども像
- 進んで学習に取り組み、やりぬく子ども
- 思いやりを持ち、助け合う子ども
- 体を鍛える元気な子ども

めざす教師像
- 使命感を持った教師
- 子どもとともに歩む教師
- 研修に努める教師

めざす学校像
- 魅力ある楽しい学校
- 信頼される学校
- 日豪の架け橋となれる学校

②指導の重点「質の高い日本の教育をめざして」

Ⅰ．「確かな学力」の育成

「確かな学力」には、基礎的・基本的な内容の理解と問題解決的な学力（「生きる力」）の両面がある。今日のような変化の激しい時代には、学校を出た後も自ら学び続ける力を育てておく必要がある。このような時代の要請を十分に認識し、基礎学力の確実な定着と「生きる力」の育成に全力を傾ける。少人数指導の良さを生かし、個に応じた授業を実践する。

Ⅱ.英語教育・現地理解教育の充実を図る

充実した英語教育と現地理解教育は本校の地の利を生かした教育活動といえる。英語教育については、教科としての英語や ESL（第２言語としての英語）の充実を図るとともに、実践的活用能力を育成するために現地校との交流学習を実施する。

Ⅲ．情報教育の推進

情報教育は時代の要請に応える教育といえる。授業などで１人１台コンピュータを使える環境を整え、発達段階に応じて、情報の検索・収集・選択・まとめ・発信等の能力を高める。

〈平成１９年度　学年・教科別週授業時数〉

学部	学年	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	学活	総合	ESL	英語	週計
小学部	1年	8.5	－	4	－	2.5	2	2	－	3	1	1	－	4	－	28
	2年	8	－	4.5	0	2.5	2	2	－	3	1	1	－	4	－	28
	3年	7.5	2.5	4.5	2	－	1	1	－	2.5	1	1	2	5	－	30
	4年	7	2.5	4.5	2.5	－	1	1	－	2.5	1	1	2	5	－	30
	5年	5	2.5	4.5	2.5	－	1	1	1	2.5	1	1	2	4	2	30
	6年	5	3	4	2.5	－	1	1	1	2.5	1	1	2	4	2	30
学部	学年	国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	技家	保体	道徳	学活	総合	ESL	選択	週計
中学部	1年	4	3	3.5	3	3.5	1	1	1	3	1	1	2	3	－	30
	2年	3	3	3.5	3	4.5	1	1	1	3	1	1	2	3	－	30
	3年	3	2.5	3.5	2.5	4.5	1	1	1	3	1	1	2	3	1	30

〈平成１９年度　年間授業日数・学期〉

①授業日数：２０５日

②第１学期：４月１６日～７月２０日

第２学期：８月７日～１２月２０日

（9月22日～30日はロイヤルショーホリデーによる休業日）

第３学期：１月９日～３月１４日

〈平成１９年度の主な行事〉

【４月】

・入学式

・第１回授業参観・保護者全体会

【５月】

・州学力テスト（中３）

・１年生を迎える会（小）

・宿泊学習（中）

【７月】

・マラソン記録会

【９月】

・メル校デー

【１０月】

・運動会

【１１月】

・ミュージックフェスティバル（小）

・宿泊学習（小）

【１２月】

・卒業生を励ます会（中）

【１月】

・水泳学習

【３月】

・卒業式

〈児童・生徒数一覧〉平成１９年５月３日現在

学　部		男　子	女　子	合　計	家庭数
小学部	1	0	2	2	1
	2	2	1	3	0
	3	3	4	7	3
	4	5	4	9	6
	5	4	4	8	6
	6	1	5	6	3
	計	１５	２０	３５	

学部		男　子	女　子	合　計	家庭数
中学部	1	2	6	8	7
	2	4	0	4	4
	3	3	3	6	6
	計	9	9	１９	

	男　子	女　子	合　計	家庭数
総合計	２４	２９	５３	３６

３．実際の取り組み

〈教科〉

中学部の国語を担当した。中学部は例年各学年とも人数は一桁（最大８名・最小１名）だったためきめ細やかな授業を行うことができた。特に「書くこと」や「話すこと・聞くこと」の指導では、個別指導が大いに効果を発揮した。また、定期テスト等の返却時に、それぞれの改善のポイントをアドバイスできたのも良かった。あえてデメリットを挙げるとすれば、「読むこと」の指導時に交流の輪が広がらなかったことだろうか。

また、小学部との併置校だったので、小学部低学年の生徒に、「纏」について説明する授業（教科書【光村図書３年】に掲載されている題材）も気軽に行うことができた。更に、中学部の生徒は行事などでリーダーとして人前で話す機会が多くあり、そうした場面も「話すこと」の指導に役立った。小中併置の小規模校という環境は、言葉の力を高めるのには非常に良い環境だったと言える。

余談にはなるが、環境という点では、海外での読書環境を心配していたが、学校図書館の充実や、インターネットを通じての本の購入などで、生徒は読書に親しんでいたと思われる。

【授業参観の様子】

〈道徳〉

道徳は、各学年の人数を考慮し、題材によって学年別もしくは３学年合同で行った。例えば、進路について考える時などは学年別、友情などの人間関係などについて考える時は３学年合同で実施した。

また、国際理解については、校内研究のテーマにもなっており、海外日本人学校の特長を生かした実践を行った。

【第１時】
- オーストラリアで生活してみて困ったことや良かったことを考える。
- 海外で働く日本人（保護者）にインタビューして海外で働くことの良さや難点を調べる。→宿題

【第２時】
- 調べてきたことを発表する。
- グループに別れ「オーストラリアの長所」と「日本の長所」を話し合う。

【第３時】
- それぞれのグループで話し合ったことを発表する。
- 「オーストラリアの短所」と「日本の短所」を話し合う
- お互いの発表を聞いて感じたことをまとめる。

こうした授業を通して生徒は「どこの国でも長所と短所がある。その長所と短所は裏表の関係になっている。」ということを感じていた。国際理

解をする上で最も大切な「外国の文化を理解し認めること」を、身近な話題から理解することができたようだ。

〈総合的な学習〉

例年、「スキル学習」「課題解決学習」「生き方学習」を三本柱にして行っている。

スキル学習

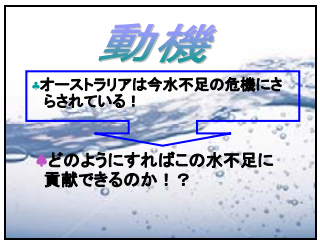
「課題解決学習」を行う上で必要なスキルを指導している。内容は「課題設定の方法」「インターネットの使い方」「電話・手紙・アンケートを用いた情報収集」「写真の撮影・利用の仕方」「パワーポイントを使った発表の仕方」などがある。

課題解決学習

年間を２部構成とし、第１部は個人研究を行う。「オーストラリア」を共通のテーマとし、各個人が課題を見つけ、調査し、模造紙１枚程度にまとめ発表する。その中から、更に研究を深められそうな課題を生徒全員の投票で選ぶ。第２部では、第１部で選ばれた課題にグループ（３学年の縦割り）で取り組み、研究を進める。研究の推進はゼミ形式をとり、調査は各自で行い、授業ではその成果を交流・検討していった。また、２回の校外学習を設定し、施設の見学や、街頭でのアンケート調査を行った。発表はパワーポイントを用いて行い、保護者にも参観していただいた。

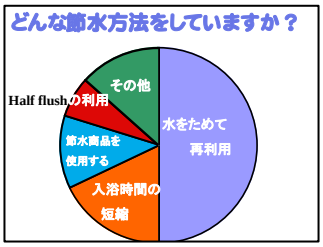
〔平成１９年度のグループ学習〕

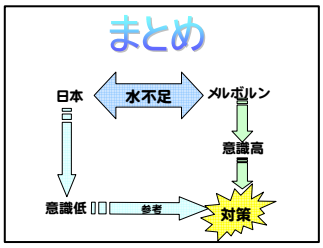
「水不足を考える」（生徒作成資料より抜粋）



日本の水
↓
仮想水に支えられている

仮想水とは
↓
海外から輸入された
食物の生産に使われた水





〔校外学習の様子〕

シティー・ウエスト・ウォーター（水道局）の施設見学。

街角でのアンケート調査。市民の水不足に対する意識や取り組みを調べた。

生き方学習

三学期にメルボルンで活躍する日本人の職場を訪問し、自らの将来を考えるきっかけとする。メルボルンで活躍する方々の生き方は多種多様でありながら共通する点もあり、生徒が将来の生き方を考える上で大いに参考になった。

平成 17 年度
ビクトリア盲導犬協会

平成 18 年度
救急センター

平成 19 年度
マサダ病院

〈特別活動〉

学級組織作り、行事に向けた取り組み、レクリエーション的な活動など、基本的には日本の学校と同様である。ここでは、自分の中で特に印象に残った取り組みを二つ紹介する。

ガンバル宣言

生徒たちは年度当初に年間を通してやりぬく課題を決め、中学部全員の前で「ガンバル宣言」として発表する。「ガンバル宣言」の条件は以下のように設定した。

①毎日行うこと。
②行ったことが証明できること。
③少し頑張れば実現できること。

実際の生徒の「ガンバル宣言」の例も示す。

・毎日１時間家庭学習を行う。
・英単語を１０個暗記する。
・通信教材を毎日進める。
・天声人語を書き写す。
・夕食の皿洗いをする。

生徒は「ガンバル宣言」の取り組みの証拠を毎日担任に提出する。更に各学期の終わりには、取り組みの成果を中学部全員の前で発表する。

内容を自分で決めたという責任感と、中学部全員で行っているという一体感もあり、生徒が着実に成長できる取り組みとなっている。

私が担任をした生徒の保護者からも「継続は力ですね。日本では家庭で自分から机に向かうことなどなかった子どもが、自分で学習するようになりました。」というような感想もいただいた。

余談にはなるが、「ガンバル宣言」は教師も行うことになっていて、私も毎日日記をつけることと現地の新聞を読むことに取り組んだ。生徒の前で宣言したことのプレッシャーは思いのほか大きく、日ごろは三日坊主になりがちな自分ですら、１年間やりとおすことができた。

南中ソーラン踊り

メルボルン日本人学校では、私が着任する以前から「南中ソーラン踊り」に取り組んできた。着任１年目までは指導できる教員がいたのだが、２年目にはその方が去られたため、踊りの指導は上級生のリーダーが行うことになった。そしてその活動は、みんなで協力して何かを作り上げることの大切さと達成感を味わうことができる貴重な機会となっている。

発表の場は多岐にわたり、初めはメル校デー（オープンスクール）や運動会で披露していた。その後、踊りを見た方から誘いの声があり、校外のジャパンフェスティバルや国際子どもフェスティバルなどでも披露するようになった。

更には、南中ソーランに取り組んでみたいという現地の学校やサークルまで現れ、メルボルンに根付いた日本の文化の一つになりつつある。

日本人会が毎年開催しているジャパンフェスティバルでの発表。

国際子どもフェスティバルでは、様々な民族の子どもたちが踊りを披露する。

以上、二つの取り組みを紹介してきたが、どちらも中学部３学年合同で取り組んでいる活動である。そのため上級生はよき手本となるために頑張り、下級生は上級生を見本として成長できるという、良い効果が生まれている。こうした学校の伝統ともいうべき力は大きく、メルボルン日本人学校の財産と言えよう。

〈交流学習〉

メルボルン日本人学校では、英語教育の一環として現地校との交流学習に取り組んでいる。中学部では、訪問と招待を２回ずつ行っている。相手校は都合により、年によって異なる場合が多い。内容はESLの教師が中心となって企画する。

オーストラリアに住んでいても、現地の同年代

の子どもと接する機会の少ない生徒も多く、この交流学習は、自分の英語を試せる貴重な機会となっている。

〔平成１９年の交流学習〕

ストラスモア校への訪問

模擬宇宙センターの施設を利用した英語と日本語の交信。

ランチタイムの一コマ。話題作りに四苦八苦。

英語と日本語の伝言ゲーム。伝言内容が変わってしまうのは万国共通。

ストラスモア校の来校

南中ソーランを教える。オーストラリアの生徒はとてもノリが良い。

最後の記念撮影。交流も深まり、メールアドレスを交換する生徒もいる。

４．日本人学校の存在意義

英語圏の日本人学校は、保護者の現地校志向により生徒数が減少していると聞く。メルボルン日本人学校もその例に漏れず、一時期は１００名を越えた児童生徒数も、ここ数年は５０名前後で推移している。しかし、だからといってメルボルン日本人学校の存在意義が低下したわけではない。彼の地で暮らす子どもたちが日本の学習指導要領に基づいた確かな学力を身に付けることができる学校が、これまでもそしてこれらも大切な場であることに変わりはない。

そうした重要な役割を担った学校を存続させていくためにも、派遣された教員の責任は非常に重いものだと感じた３年間だった。

メルボルン日本人学校を紹介するために作ったパンフレット

５．おわりに

日本に帰国して半年が経とうとしている今、メルボルンでの日々を振り返ってみると、本当に多くの貴重な体験ができたと改めて感じる。そうした経験や現地で出会った人との関係などこれからの教職人生で大きな財産となるだろう。

そして、その財産は自分だけの物であってはならない。実践を通して、子どもたちに伝えていくべきものである。そのことを肝に銘じながら、これから自分にできることを考えて実践していきたい。